**典礼解説：復活の主日と復活節

　復活節は、復活の主日から聖霊降臨の主日までの50日間です。「ペンテコステ」というと現在の典礼暦では聖霊降臨の主日（Dominica Pentecostes）を指しますが、4世紀初めごろまでは、復活の主日後の50日間をペンテコステと呼んでいました。この期間は主の復活を喜び祝う期間として一つの祝日のように祝われ、典礼では繰り返し「アレルヤ」が歌われました。また、断食は行わず、祈るときにはキリストの復活のしるしとして立つ姿勢が用いられました。
聖アウグスチヌス（354年～430年）は次のように述べています。「（わたしたちは）復活祭前の季節を断食と嘆願のうちに過ごしますが、復活祭後の季節は断食をやめて賛美のうちに過ごします。わたしたちの歌っているアレルヤはこの賛美にほかならないのです」。ご存じのように、アレルヤは「主を賛美せよ」という意味です（『詩編講解』148, 1-2〔『毎日の読書 第3巻』カトリック中央協議会、1991年、85頁〕）。
そして、5世紀ごろから、復活の主日後40日目に主の昇天を祝うようになると、主の昇天の記念まではキリストの復活を祝い、その後に続く10日間は聖霊降臨の主日の準備期間という色彩が強くなりました。現在の教会は古代教会の実践に立ち返り、聖霊降臨の主日までの50日間を一つの祝日、「大いなる主日」（聖アタナシオ『復活祭書簡』1）と位置づけて、キリストの過越の神秘を喜びのうちに祝っています。**

　**復活の主日から復活節第2主日までは「主の復活の8日間」と呼ばれ、とくに盛大にキリストの復活を祝います。古代教会では、復活の主日に洗礼を受けた人はこの8日間中、とくに秘跡に関する秘義教話（Mystagogia）を司教から聞くために集まりました。その際、彼らは白い衣を着ていたので、この週は「白衣の週」とも呼ばれました。主の復活の8日間は主の祭日のように祝われるため、典礼日の優先順位表でも上位に置かれています。8日間中のミサでは栄光の賛歌（Gloria）を歌い、ミサと「教会の祈り」の派遣の祝福には「アレルヤ」を加えます。また、復活の続唱（Victimae paschali laudes）は復活の主日以外の日には任意で歌われます。**

**上記のように、古代教会では復活の主日から復活節第2主日までの8日間、新しく信者になった人は白い衣をまとっていました。この白い衣は復活節第2主日に脱ぐこととなっていたため、この主日を「白衣の主日（Dominica in albis）」と呼ぶ習慣が生まれました。この名称は第2バチカン公会議前の『ローマ・ミサ典礼書』に残っていましたが、第2バチカン公会議後は用いられなくなりました。また、2000年5月5日には教皇庁典礼秘跡省から、復活節第2主日に「神のいつくしみ」という名称を加えるとする教令（Prot. n. 1002/00/L）が発表されました。この教令は次のように述べています。「現代において、キリスト信者は世界の至る所で、典礼の中で、とりわけ神の愛に満ちた寛容さがとくに輝き出る過越の神秘の祭儀において、神のいつくしみを賛美することを願っている。この願いに応えて、教皇ヨハネ・パウロ2世は、『ローマ・ミサ典礼書』の“復活節第2主日”の後に、今後、“神のいつくしみの主日”という名称を加えることを決定された」。これを受けて、日本の教会では2003年から、復活節第2主日に「神のいつくしみの主日」という名称を加えています。**

**復活徹夜祭の光の祭儀で用いた復活のろうそくは、死と罪の闇に打ち勝って復活したキリストがともにおられることを表わします。かつて、復活のろうそくは、主の昇天の祭日のミサの福音朗読後に消すことになっていました。これは、復活したキリストが天に昇られたことを表現しようとした習慣だと思われます。しかし現在では、復活節の最終日である聖霊降臨の主日まで、ミサや朝・晩の祈りなど盛大に執り行われる典礼で復活のろうそくをともします。復活節以外の時期には、とくに洗礼式と葬儀のときに用いることができます。

　復活節は伝統的に「アレルヤ」を歌う季節とされてきました。上述のように、復活の8日間中のミサと「教会の祈り」の派遣の祝福には「アレルヤ」が加えられます。
また、復活節中のミサの入祭唱と拝領唱にも「アレルヤ」を付けて唱えます。さらに、聖霊降臨の主日のミサでもミサの派遣の祝福に「アレルヤ」を加えます。
普段唱えられている「お告げの祈り」も、この時期は「アレルヤの祈り」が代わりに唱えられます。**

**復活の主日と聖霊降臨の主日のミサでは、アレルヤ唱の前に続唱が歌われます。続唱とはラテン語の｢セクエンツィア（Sequentia）｣の訳で、「連続」、「続き」という意味です。中世のころ、アレルヤ唱の「アレルヤ（Alleluia）」の最後の「ヤ（ia）」の母音aに、装飾的な旋律が付けられるようになりました。9世紀以降、装飾的に音符が続く部分に後から歌詞を当てはめ、後にこの部分のみがアレルヤ唱から独立して「続唱」として歌われるようになったといわれます。かつてはアレルヤ唱に続けて歌われましたが、現在はアレルヤ唱と福音朗読の結びつきを重視して、アレルヤ唱の前に歌うことになっています。復活の主日のミサでは、復活の続唱（Victimae paschali laudes）を歌います。この続唱は、ブルグンドのヴィポ（Wipo Bulgundus、10世紀末～1050年ごろ）によって11世紀初めに作られたといわれます。復活の続唱は、復活の月曜日から復活節第2主日までのミサでも任意で歌うことができます。聖霊降臨の主日のミサでは、聖霊の続唱（Veni, Sancte Spiritus）を歌います。この続唱は「黄金の続唱」とも呼ばれる代表的な続唱です。**

**「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」より**

　**22　復活の主日から聖霊降臨の主日に至るまでの50日間は、一つの祝日として、また、より適切には「大いなる主日」として、歓喜に満ちて祝われる。「アレルヤ」がとくに歌われるのは、この季節である。**

**23　この季節の主日は復活節主日とし、復活の主日に引き続き、復活節第2、第3、第4、第5、第6、第7主日と名づける。この50日間の聖節は、聖霊降臨の主日をもって終了する。**

**24　復活節の最初の8日間は、「主の復活の8日間」と呼ばれ、主の祭日のように祝われる。**

**25　復活後40日目には、主の昇天を祝う。それが守るべき祭日でないため、復活節第7主日に移された場合は別である。**

**26　主の昇天後から聖霊降臨の前日の土曜日までの週日は、聖霊を迎える準備にあてられる。**

**『朗読聖書の緒言』より**

**主日

　100　復活節第3主日まで、福音朗読は復活したキリストの出現を述べている。よい牧者についての朗読は復活節第4主日に定められている。
　復活節第5主日、第6主日、第7主日〔日本では、この主日は「主の昇天」の祭日になる〕には、最後の晩さんの後に主が行われた説教と祈りの一部が朗読される。
　第1朗読は使徒言行録からとられ、3年周期で並行して発展していくようになっている。こうして、毎年、初代教会の生活から始まって、あかしと発展の後をたどるのである。
　使徒書の朗読については、A年にはペトロの第1の手紙が、B年にはヨハネの第1の手紙が、C年には黙示録が朗読される。
　これらの箇所は、この季節独特の喜ばしい信仰と揺るぎない希望の精神に非常によく調和している。**

**週日

　101　第1朗読は主日と同じくほぼ継続して使徒言行録からとられている。福音については、復活の8日間中は主の出現の記事が朗読される。
　その後、ヨハネ福音書の準継続朗読が行われるが、ここではどちらかというと復活の色彩の濃い箇所がとり上げられ、こうしてすでに四旬節に行われた同書の朗読が完成する。
　この復活の朗読においては、最後の晩さんの後の主の説教と祈りが大半を占めている。**

**昇天と聖霊降臨の祭日

　102　昇天の祭日には、第1朗読として使徒言行録による昇天の出来事の叙述が保持されている。この箇所は、父の右に上げられたキリストについての使徒書の朗読によって補完される。
　福音朗読には、各周期の年のために福音記者の異なるそれぞれ固有の箇所が用意されている。
　聖霊降臨の前晩のミサには、この祭日の多様な意味を明らかにするために旧約聖書の四つの箇所が掲げられているが、そのうちの一つが任意に選ばれる。
　使徒書の朗読は現に教会の中で働く聖霊の役割を示している。福音朗読は、栄光を受ける前にキリストがなさった聖霊の約束を思い起こさせる。
　当日のミサにおいては、第1朗読のために聖霊降臨の偉大な出来事に関する使徒言行録による叙述が伝統的に採用されている。
　使徒書の箇所は、教会生活における聖霊の働きの効果を示している。福音朗読は、イエスが復活の日の夕方、弟子たちに聖霊を授けたことを思い起こさせる。
　任意に用いることのできる他の箇所は、弟子たちと教会に対する聖霊の働きについて扱っている。**